

▶ **BRCA1/2 変異保持者の遅延卵巣摘出併用リスク低減卵管摘出術とリスク低減卵管卵巣摘出術の比較：前向き選択式比較試験の3年間の結果**

Salpingectomy with delayed oophorectomy versus salpingo-oophorectomy in BRCA1/2 carriers : three-year outcomes of a prospective preference trial.

Van Bommel MHD et al

BJOG 132 : 782-794, 2025

背景 早発閉経を誘発することなく、卵管卵巣癌を予防する方法として、リスク低減卵管摘出術(risk reducing salpingectomy ; RRS)と遅延卵巣摘出術(delayed oophorectomy ; DO)の併用が検討されている。

目的 BRCA1/2 変異保持者に対する RRS がリスク低減卵管卵巣摘出術(risk-reducing salpingo-oophorectomy ; RRSO)と比較し、術後3年間に於いて閉経関連の quality of life(QOL)にどのように影響するかを調べた。

方法 オランダの25~40歳(BRCA1)または25~45歳(BRCA2)の閉経前の患者を対象に、患者希望に基づき、RRS+DO群とRRSO群に治療の割り付けを行った。RRS+DO群は25歳からRRSを行い、最長45歳(BRCA1)または50歳(BRCA2)でDOを施行。RRSO群は35~40歳(BRCA1)または40~45歳(BRCA2)でRRSOを行い、禁忌でない限りホルモン補充療法(hormone replacement therapy ; HRT)が推奨された。RRS群とRRSO群間でGreene Climacteric Scale(GCS)を用いて測定した閉経関連QOLを比較した(GCSは0~63の範囲で評価し、スコ

アが高いほど更年期症状が多いことを表す)。

結果 RRS+DO群は410人、RRSO群は160人であった。術後3年時点のGCSのベースラインからの平均変化は、HRTなしの場合、RRS群で+1.8、RRSO群で+3.9であった。RRSO群とRRS群の調整平均差(MD)は、4.3[95%信頼区間(CI)2.1-6.5, $p < 0.001$]で、RRSO群のGCSスコアがRRS群より高かった。また、3カ月後と12カ月後のMDは7.9(CI 5.9-9.8)と8.5(CI 6.5-10.5)であり、術後3年より術後1年目のほうが差が顕著であった。RRSO後にHRTを行った群とRRS群を比較しても、術後3年のMDが2.4(CI 0.8-3.9, $p = 0.002$)、3カ月後と12カ月後は2.9(CI 1.7-4.2, $p < 0.001$)と3.5(CI 2.1-4.8)であり、HRTありのRRSOよりRRSのほうが閉経関連QOLに関して、優れていた。

結論 本試験の3年間の解析では、術後3年間を通じて、閉経関連QOLに関してRRSがHRT使用の有無を問わず、RRSOよりも優れていることが示された。

(金沢医科大学医学部産科婦人科 飯田紗羅 抄)

▶ **慢性胎盤剝離・羊水過少症候群(CAOS)の周産期アウトカム**

Perinatal outcomes of chronic abruption oligohydramnios Sequence : a multicenter retrospective observational study.

Kasuga Y et al

J Clin Med 14 : 5523, 2025

背景 早産の原因となる慢性胎盤剝離・羊水過少症候群(chronic abruption-oligohydramnios sequence ; CAOS)は早産率や胎児・新生児の死亡率が高いにもかかわらず、その周産期および新生児の転帰については未知の部分が多い。

目的 日本の関東地域で実施した多施設共同研究で、CAOSの周産期および新生児転帰を評価した。

方法 当該地域に所属する123の周産期医療センターで2017年1月1日~2022年12月31日までの間に経験したCAOSの管理に関する後ろ向きコホート研究である。CAOS患者はエリオットらによって定義されたCAOSの診断基準である、①胎盤の位置ではなく腔からの出血があること、②当初羊水量が正常であること、および③破水のない羊水過少症であることに合致するものとした。羊水過少症のない患者、および他施設への転院により予後が不明となった妊娠22週以降の3例の分娩は、本研究から除外された。

結果 対象82例の内訳は流産7例、人工妊娠中絶5例、妊娠22週以降分娩70例(単胎:68例、双胎:2例)であり、88%で腔出血が初期症状であった。初期症状発現時の平均妊娠週数は 17.3 ± 5.0 週、68例の単胎妊娠における平均分娩時妊娠週数は 25.2 ± 2.8 週であった。CAOS診断時および妊娠中の最大白血球数の平均は、それぞれ $11,589 \pm 2,885/\mu\text{l}$ 、 $15,357 \pm 4,745/\mu\text{l}$ であった。診断時の平均CRP値および妊娠中の最大CRP値の平均はそれぞれ $1.0 \pm 1.2 \text{ mg/l}$ 、 $2.0 \pm 2.1 \text{ mg/l}$ であった。絨毛膜羊膜炎(chorioamnionitis ; CAM)は43例(63%)で確認された。新生児は全員新生児集中治療室に入院した。68例の単胎新生児のうち、5例が出生直後に死亡した。

結論 CAOSはCAMなどの感染症と関連する可能性があり、周産期および新生児期の不良な転帰と結びつくまれな周産期合併症である。

(金沢医科大学医学部産科婦人科 劉 璟壬 抄)